明海大学不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第406回

記念碑のような公衆トイレ

外国人向け日本のPR効果も

川崎 優太
不動産学部4年

【学生の目】

高さではスカイツリーに抜かれたものの優美な形状の東京タワーは今なお東京のシンボルだ。近くには芝公園や徳川家ゆかりの増上寺もある。御成門、大門近辺は東京の中でも格式の高い歴史を持つエリアだ。

外国大使館も多く、来日観光客も多く訪れる。こだわりを持つ層から好まれそうなカフェやレストランもあれば、コロナ禍まではサラリーマンでにぎわった居酒屋もある。歴史と多様性に富む街である。

そんな街を歩く中、不思議な建物を見つけた。古風な店と勘違いする外観で、地下に下る階段も不思議さを増幅する（写真）。

よく見ると青い男性と赤い女性の見慣れた看板が付いていた。公衆トイレと分かるが、「港区立」という表示に安心感を覚える。

公衆トイレとは思いもしなかった理由を考えた。まず、重厚感である。渋谷区が安藤忠雄や隈研吾など、著名建築家設計の公衆トイレを設置しているように、最近はモダンでおしゃれなデザインのものが多い。一方、写真の建物は鬼瓦を筆頭にどっしりとした瓦ぶきである。トイレは仮設建築的な印象があり、感覚的に重厚さとは無縁である。

次に、建物の高さである。トイレはすぐ入れるよう平屋建てのことが多い。階高は3㍍程度で一定の高さの外壁が目に入る。それがトイレと分かることにつながるが、ここでは外壁面はほとんど見えない。人が入れそうにない高さで収まっているのは、階段の途中から屋根をかけているからだ。だまし絵的な設計である。

更に、地下を利用する点だ。トイレは防犯や換気などのために地上に設けることが多い。一般の建物と異なり、特に女子トイレは出入りが外からも見えるようにして防犯性を高める。狭い階段を下りた地下に公衆トイレを設けることは想定外である。もっとも、土地の有効活用の面では地下に設けることで歩道が広く使える。

そして、高級な使用資材だ。手摺壁を厚くして御影石で仕上げている。水が入らないよう一段高くした入口の床、周りの植栽帯や入口脇の木に人や物がぶつからないようブロックする部分も御影石を利用している。公衆トイレのイメージから程遠い材料を用い、写真のアングルからは灯籠か史跡の記念碑のようでもある。古く小さい建物だが日本建築の作法がちりばめられていて、ネットには外国人向けの案内も複数載るなど、日本のPRに役立っている。

公衆トイレとは分からない外観

【教員のコメント】

公衆トイレ、交番、地下鉄入口の屋根などの小建築物でデザインコンペ方式が採用される。建築物や工作物であることを消し去るかのように軽やかで宙に浮くようなデザインが多い中、土着材料を用いた重厚な造りが風土と歴史を発信している。